

2023年度公益財団法人日本芸術協会奨学金 第2回活動報告書（2024/01/26）

村上祐介（indust-film、映画制作）

2020年から取り組んでいる連続ドラマ「portrait(s)」の制作を引き続き行なっています。2023年は1年で合計39回の撮影を行う事が出来ました。制作が長期化している今作ですが、クランクアップを迎える演者が出てきました。

< 「portrait(s)」 進捗報告：子どもパートの親シーン >



「portrait(s)」はセクシャルマイノリティ(LGBT)の多様な人が登場する群像劇で、いくつかのパートから成りたっています。2023年前半は前回の活動報告でも記載した通り、子どものパートの撮影を行っていました。7月に子どもパートを撮り終える事が出来た後、残るシーンとして子どもの親のシーンに取り掛かりました。自分の好きな対象が男性ではないかと思い悩む小学6年生の男子：正岡倫典（まさおかともり）の両親を湖森彩八夏さんと折笠慎也さんに演じていただきました。折笠さんとは前作「あなたとの距離について」で主人公の裕樹を演じて頂いて以来でしたが、今回親のシーンを作るにあたり、始めの段階から折笠さんに出演をお願いしたいなあと考えていたので、出演を快諾頂けて嬉しかったです。折笠さん演じる父親を印象的かつ、更にあたたかいキャラクターにしたいとの思いで、折笠さんの地元である青森のイントネーションで演じてもらいました。

湖森さんは2023年3月に行ったオーディション面談を経て選ばせていただきましたが、ご自身の持つほんわかした雰囲気キャラクターとマッチして、良い親子の組み合わせが作れたと思っています。折笠さんと湖森さんは初共演でしたが、長い台詞を共に成し遂げる同志のような雰囲気、すんなりと打ち解けている様子が印象的でした。お二人のおかげで、子どもを見守る温かな親、家族を作る事が出来たと思っています。9月に全部のシーンを撮り終えクランクアップとなりました。



お二人から撮影後の感想を頂いたのでシェアさせていただきます。



湖森彩八夏さん

最初出演が決まった時、みなさんと同じように真面目なトーンで演じるんだろうなと思っていたんですが、現場に入ったら村上監督から「この親子のシーンは明るくちょっとコメディな感じで撮りたいんです。」と言われ戸惑いながらも、楽しく撮影に参加させていただきました。私自身はまだ結婚も子育ても経験が

なく、お母さんを演じるにあたって少し不安も感じていたんですが、村上監督の書いてくださった脚本の言葉のあたたかみに触れ「この世界を現実にするぞ！」と勇気が生まれました。見てくださるみなさんにもあったかい愛が伝わるといいな、と思っています。1人1人が尊重され、心豊かに生きられる時代が来ますように。



折笠慎也さん

「あなたとの距離について」以来、ひっそりにindust-film作品に参加しました。変わらず温かい現場で、初心に還ったような気持ちで楽しく芝居出来ました。もうすでにたくさんの方々が関わっている現場、どこまで輪が広がっていくのか楽しみです。

< 「portrait(s)」 進捗報告：女性パート開始 >



念願だった女性パートの撮影をようやくスタートする事が出来ました。撮影を始めるにあたって、演者のお二人であるイワセイクエさんと寺杣風花さんに集まっていたき、顔合わせを兼ねた打ち合わせの場を設けさせていただきました。参加していただく全員にお伝えしている事ですが、撮影内容に関して事前にお互いに確認し、決して無理を強いた撮影を行わないという事と、やりたくない事や台詞があれば伝えて欲しい旨をお伝えしています。今回お二人には、物語の中でお互いに惹かれ合う恋愛の関係を演じていただく事になるので、なおさら事前に演者側と制作側で考えている事や思いをすり合わせておいた方が良かったと思った為集まっていたきました。とはいえ、集まる直前まで、どう話そう、何を話そうとそわそわしてその日を迎えたのですが、改めて意見を交換し、思いの共有が出来て良い場となったと思っています。



撮影自体は原宿から渋谷周辺でのデートのシーンから始まりました。野外の撮影は、騒音や人通り等も考慮しながら進める必要がある為、待ち時間などが長くかかる場面がある中で、辛抱強く取り組んで頂けて感謝しています。



また、イルミネーションを含む撮影を二日間にわたって行いました。このシーンは結構な長台詞の場面で、大切なシーンの為、脚本を演者に渡した後も、これで良いのかずっと悩んでいました。1日目の撮影が終わった後に、2日目に撮る部分の脚本を修正しました。撮影直前の修正にも関わらず、イワセさん、裕菜さんのお二人とも完璧に台詞が入った状態で当日臨んでいただいた事には本当に頭が下がりました。日没から終

電間際まで寒空の野外での撮影は体力的にとっても厳しいものでしたが、お二人のおかげでその時期しか撮れないイルミネーションのシーンを撮り切る事が出来ました。ご迷惑をおかけしましたが、修正して良くなったと思っていますし、このシーンの撮影を通して女性パートを制作していくにあたっての自信が少しつきました。



「portrait(s)」の開始当初から女性のセクシャルマイノリティの日常のドラマを描きたいと思っていました。それは、近年BL作品に代表されるような男性のセクシャルマイノリティを描いた作品は増えたと感じる一方で、女性を描いた作品がそれらに比べて少ないと感じていたからです。そういった状況の中で、「portrait(s)」がセクシャルマイノリティをテーマとした時に、女性のセクシャルマイノリティの話を描く事は不可欠だと考えました。また、セクシャリティのみならず、今の日本で女性が置かれている社会的、性的、経済的などの、不平等な立場に置かれている現状に対しても、ドラマを通じて連帯を示す必要があると思っていました。とはいえ、私自身は男であるので、分からない事が多々あり、脚本を書くのに現在もとても苦労しています。演者の皆さんにも助言をいただきながら、なるべく自分との共通項を見つけ、実感を込めた物語が作れるよう引き続き努力していきます。

< 「portrait(s)」 進捗報告：カミングアウトのシーン >



公開済の第1話 <https://youtu.be/ZhCJNDvAnlc?si=nZi11oYllhvySiuE> で男性同士のカップルが登場しますが、家族へのカミングアウト（同性のパートナーがいる事を伝える）がテーマとなっています。カミングアウトの1日を描いた脚本は、シーンを細かく書き込んだ結果、30ページ以上となりました。その為、2021年から千葉の個人宅をお借りし、断続的にカミングアウトに関わる家族のシーンを撮影してきました。複数回撮影を行った後に、家主様の状況の変化があり、今後の撮影は難しい旨伝えられました。重要なシーンがまだ撮り切れていない中で、今後どうしたら良いか、別の場所を同じ家の別の部屋に見立ててシーンを作るか等考えていましたが、ひとまずは子どもの撮影に追われる事となったので、カミングアウトのシーンの撮影は保留となっていました。そこから1年少し過ぎ、もしかしたら状況がまた変わっているかもしれないとの楽天的な考えから、無理を承知で1日だけ撮影を行わせて頂きたい旨ご連絡しました。1日だけなら、と了承をいただき、撮影を行う事が出来ました。





ご迷惑をおかけしているにもかかわらず、今まで同様にまかないの食事を準備していただき、温かな休憩をとる事が出来ました。家主様のお心遣いに本当に感謝しております。

そして、その日に撮り切らなければならないとはいえ、大幅に撤収時間が遅くなってしまった事は本当に申し訳なく思っております。

「portrait(s)」全体としても山場のシーンである撮影を撮り終える事が出来た事、感謝しかありません。

続いて家族のシーンを撮り終えるべく、カミングアウトの1日の出来事である、祖父の三回忌シーンの撮影を、東京霊園様で行わせていただきました。

撮影前にロケハン（見学）として訪れたのですが、広大な敷地の為、具体的な撮影場所を決めるのに2時間以上歩き回りました。日差しの向きや、お墓の背景なども考慮し、あーでもないこーでもないと言いながら歩き続け、ようやく納得の場所を見つけた頃には2万5千歩も歩いていました。



日没に焦りながらも閉園時間まで行わせて頂き、何とか霊園でのシーンを撮り終える事が出来ました。この日で父役の名村藍さんがクランクアップとなりました。

2020年のオーディション面談での出会いから早3年。断続的とはいえ、長い期間作品に関わって頂き感謝しております。良い組み合わせのキャスティングで、実感ある家族を作る事が出来たと思っています。



＜「portrait(s)」進捗報告：友達パート他＞

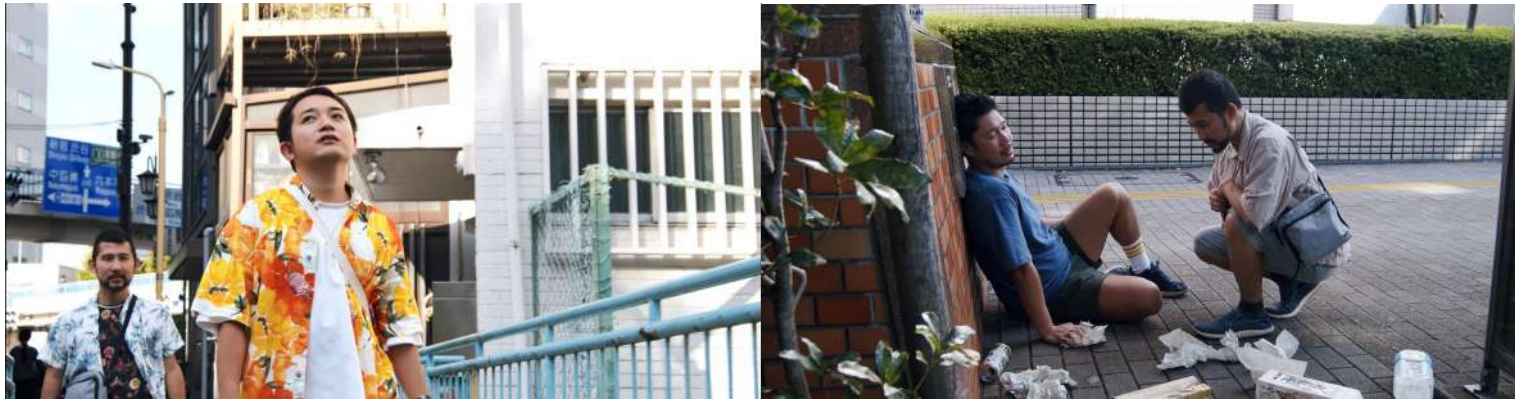
予定していた以上に子どものパートを撮り終わるのに時間がかかってしまい、他のパートの演者さんをお待たせしている状況でしたが、他にもいくつかのパートの撮影を進める事が出来ました。その内の1つが友達パートです。公開済みの第2話 https://youtu.be/6gj8vzXgl_w?si=q0zqt_BOCa3Vxmxu でヘアドネーションという髪の毛の寄付をする為に髪を切るシーンがあるのですが、その後に続くヘアドネーションの是非を巡ってのやりとりのシーンを撮影しました。

私自身、「portrait(s)」を始める直前の2020年の春まで伸ばし続けた髪を切り、送った経験があります。そして、私の母が癌の闘病時にウィッグを使っていた事もあった為、ドラマの中でヘアドネーションの事を扱ったのですが、第2話公開からしばらくした時に



「ヘアドネーションは良いことか？」という疑問を呈する記事を目にしました。

その記事が指摘している事になるほどと腑に落ちる部分がありつつも、自分なりに別の視点もあるのではとも感じました。とはいえ、私自身はウィッグを必要とする当事者ではないので、たくさんの方の体験談を読むとともに、母にも改めてウィッグについて聞いたりしながら、その記事で懸念されていた「単純な美談化」にしない為にも、ドラマに反映させたいと思いました。ドラマ的にどう語るのかは苦労しました。説教臭く、演説のようになってしまわないよう、友達二人に良い面、悪い面を語らせる役割を分ける事で何とか描けたかなと思っています。ただ、上手くいったのかは実際に編集して繋いでみないと分からないのが正直な所です。



演技初経験の方に長い台詞のシーンを演じてもらう事になり、大変だったと思うのですが、楽しんでやっていただけたようで何よりだと思いました。

その他に、ダイジェストになりますが、撮影が進んだパートを画像にて報告させていただきます。





1年を通して怪我や事故、大きなトラブル等無く撮影を進める事が出来て本当に良かったです。演者の皆様に感謝してます。

＜ご報告・活動拠点の変更＞

2006年の活動開始から約18年間、東京を拠点に活動を行ってきましたが、2024年春からは伊豆に移り、新たな活動のベースを構築していきたいと考えています。拠点を移す理由としては、ここ数年のコロナ禍という名の全世界的な騒動を経験し、一極集中的な場所や価値観からは距離を置き、ローカルな立ち位置、ローカルな視点で多角的に世の中を見つめて制作を行っていききたいとの思いからです。それはindust-filmが掲げるインディペンデント（独立的、自主的）で、ハンドメイド（手作り）の映画制作にも自ずと繋がっていくと思っています。

ただ、「portrait(s)」の撮影はまだまだ行う必要があるので、二ヶ月に1度くらいの頻度で東京に来て、制作を続けていきます。昨年来、撮影続きで新しいエピソードの編集と公開が停滞している状況ですが、撮影で東京に出向くまでの期間は、否が応でも編集に向き合う環境になるので、良い変化ではないかと思っています。何故伊豆なのかは私自身現在も良く分かっていません。伊豆は何のゆかりもない場所ですし、訪れた事すらなかった場所でしたが、土地が与えてくれるインスピレーションを信じていますし、今後の活動に自分自身が期待し、ワクワクしています。まずは数年がかりで取り組んでいる「portrait(s)」を、環境が変わる事を追い風に、良い形に仕上げるべく引き続き努力していきます。

